

採れた野菜を味わおう ～ケチャップ作り～

岡崎市島坂保育園（愛知県岡崎市）

[5 歳児]

カボチャ、キュウリ、エダマメ、ピーマン、オクラ、ナスなどいろいろな野菜が収穫できるようになる。たくさん採れるミニトマトについて、そのまま食べるだけでなく、他の食べ方はできないものかということで、トマトでできているものは、どんなものがあるのかを子どもたちと考えてみた。

子どもたちの中からは、「トマトジュースがいい」「トマトスープは？」
「ケチャップ...ポテトにつけて食べたい」といった意見が出され、子どもたちの意見としてもまとまった“ケチャップ作り”をすることになる。

「ケチャップの中には、何が入っていると思う？」と尋ねると、「お砂糖？」「塩？」という答えが返ってくる。「当たり前...すごいね、よくわかったね。あと、トマトの他に野菜も入ってるんだけど何だと思う？」と聞くと、「ピーマン？」「ナス？」と、身近な野菜を言う。「違うなあ...」と、言うところ「じゃあ、タマネギ？」と言う。子どもたちと確認した材料と、目の前で調理をしても危険が少ないようIHのクッキングコンロ、フードプロセッサーを用意してケチャップ作りを始める。



作るところを見るというよりも、子どもたちが、自分で作っているという気持ちをもって欲しいと思い、子どもたちに所々手順を考えられるように進めていく。

「さあ、最初は何をしたらいいかな？トマトを、そのままお鍋にかけるのかな？」と聞いてみると、「えーっ、切ってからじゃないの？」という意見が出た。その時に収穫できていたミニトマト75個と、足りない分を補うためのトマト2個を、順番に子どもたちが切る。切り口を見て、「線がある」と言う子や、「家のトマトには、種があったよ」と、大きいトマトとの違いを話す子がいる。しかしそのうち、ミニトマトの中にも小さい種があるのを確認していた。横に切ってみせると、切り口の違いを「お花みたいだね」と表現していた。



切ったトマトをつぶしていく。

「この中に、お水って、入れた方がいいと思う？」と聞くと、「入れた方がいい」「入れないんじゃない？」と、意見が分かれた。「どっちかなあ...」と答えを出さずに、フードプロセッサーで、つぶし始める。そうすると、「やっぱり入れなくていいじゃん」と、つぶした状態を見て子どもたちが答えを出した。だんだんとつぶれていくのを見て「ジュースみたい」「イチゴの色みたいだね」と、固形だったトマトが液状になり、赤だった色が変わっていく様子を面白そうにじっと見入っていた。



つぶしたトマトを煮る

今度は、それを漉す。
保：「上には、何が残ってる？」子：「種と、皮...」
保：「下は？」子：「ジュース...」
保：「ジュースが、ケチャップになるんだね」
子：「なんかリンゴジュースみたいに見える」



「さあ、いよいよ火にかけるよ。本当にケチャップになるかな？」と話し、子どもたちが順番で、次々に鍋の中をかき混ぜていくことになった。焦げないように気をつけないといけないことを知らせると、申し送り「下の方に力を入れて混ぜるといいよ」と伝え合う姿が見られた。鍋の中を見ながら、「少なくなってきたよ」「どろどろしてきた...」「ケチャップになってきた！」と、30分くらいの間交代で混ぜるうちに、だんだんと様子に変化していくのを感じ取っていった。



調理の過程での色の変化を聞く。保：「トマトをつぶしたら、何色になった？」子：「イチゴのピンク色」保：「煮たらどうなった？」子：「オレンジ、ニンジンみたい」保：「最後は？」子：「トマトの色。ケチャップみたいになってきた」と、子どもたちは、色が変わっていったことを感じ、いつも食べているケチャップと同じようになっていったことを喜んだ。

保育園のみんなに分けてあげられるくらいの分量ができ、その日のおやつのパテに添えて、食べてもらうことができた。「おいしい」「甘いよ」「ケチャップだ」と、自分たちの作ったケチャップに感激した子どもたち。大人たちも、想像を遙かに超えたおいしさに驚くほどであった。



考察

春にヨモギ団子を作ったことが楽しかった子どもたちは、また、みんなで調理ができることにワクワクしていた。自分たちが育てたものを、自分たちで調理して食べるという経験は、子どもたちにとって魅力ある活動であると思う。それも、自分たちで思いついたケチャップ作りが実現できたことで、より満足感を感じることができたのではないかと思う。目の前で、食材がどんどん変化していく様子にじっと見入ったり、その様子を言葉に表したりして感動を味わい、活動の中で友達と協力をしたり、思いを伝え合うことで、より楽しさを実感することができていくのだと思う。

野菜を収穫している時に、K児が「野菜も生きてるんだよね」とつぶやいた。「そうだよね。生きてる命をみんなにくれるんだよね。」と保育者自身、はっと気付かされた。それは、野菜を小さい苗から世話し、日に日に葉っぱが茂り、花を咲かせ実を成らしてどんどん大きくなっていくのを目の当たりにしたからこそその気付きである。教えられて気付いたことではなく実体験をしたからこそ出てきた心からの一言であり、その言葉には重みがあった。この心からの言葉は、その子の中に芽生えた科学する心の証なのだろうと感じた。

みどころ

様々な野菜に関心をもって栽培したり、幼児なりに特徴や違いに気付いたり、ミニトマトをどのように食べたらいいのか食べ方を考えたりするそれぞれの体験を通して、様々な科学する心が育まれていたことが、「トマトケチャップを作る」と決まるまでの過程でよくわかります。また、意欲的にケチャップ作りをしているので、トマトに手を加える（調理する）ことで次第に形も色も匂いも変わっていく様子や食べることから、科学する心が育まれることが期待できます。